

デ・イ・ローゼンベルグ

『19世紀40年代におけるマルクスとエンゲルスの経済学説の発展の概要』1954年

—責任編集者 エヌ・ア・ツァーゴロフ教授—

Д. И. Розенберг

«Очерки Развития Экономического Учения Маркса и Энгельса в Сороковые Годы XIX Века»

Институт экономики, АН СССР. Москва, 1954 г.

—Ответственный Редактор

Проф. Н. А. Цаголов—

1

本書は、『資本論注解』の著者としてわが國でもなじみぶかいソ同盟科学院準會員デ・イ・ローゼンベルグの遺稿である。彼は、この著述を完成しないうちに、1950年2月になくなった。そこで科学院経済学研究所は、1953年に、擴大學術會議でこの遺稿を審議し、若干の補足をくわえて出版することにきめた。遺稿の整理と補足の執筆の仕事は、ツァーゴロフ教授の責任編集のもとに、実際にはイ・ゲ・ブリューミン教授 проф. И. Г. Блюмин にゆだねられた。こうして本書は、ローゼンベルグの執筆にかかる本文283ページのほかに、ブリューミンの書いた「序文」14ページと「編集者の補足」25ページとから成っている。

本書は、1844年以前のマルクスとエンゲルスの最初期の労作から、1848年の『共産黨宣言』にいたるまでの諸労作を直接の研究対象として、1840年代におけるマルクスとエンゲルスの経済学説の発展をあとづけている。そのさい、個々の章で、それがとりあつかっている個々の労作あるいは諸労作が書かれたころのマルクスとエンゲルスの活動を、著者は傳記的に叙述している。いうまでもなく、マルクス主義は、書齋のなかで考えだされたものではなく、マルクス主義の創始者たちの社会的実践のうちに、その前進と結びついて形式されていったものであるから、マルクス主義の形成を論じるばあい、この方法は當然とられるべきものであろう。そして本書は、一般的に言って高度の學術研究書であるにかかわらず、この方法を採用したことによって、初學者や入門者にとってもある程度ちかづきやすいものになっている。

ひろく知られているように、マルクスとエンゲルスは、本書が対象としている年代には、まだ従來の経済学 Political Economy にたいする彼らの批判をおえていなかった。彼らが従來の経済学の批判をおえて新しい経済学理論を確立したのは、50年代の末のことである¹⁾。だが

他面では、マルクスとエンゲルスは、1845-46年には、こんにち『ドイツ・イデオロギー』として知られる手稿をまとめあげて、すでに唯物史観を確立していた。さらに、1848年に發表された『共産黨宣言』のなかには、科學的社會主義の諸命題が基本的にはすべて確立されているのを見ることができる。マルクスが、確立された唯物史観の命題を導きの糸とし、確立された科學的社會主義の理論を推進力として、新しい経済学の體系の創造のために、50年代に「狂ったように、夜通し²⁾」働き、こうして、1859年の『経済学批判』をへて1867年の『資本論』第1巻の發刊となったことは、周知のとおりである。だから本書は、マルクス主義の三つの構成要素(哲學、経済学、社會主義)のうち二つが確立されながら、「マルクスの理論の、もっとも深遠な、全面的な、そして詳細な確認であり適用である³⁾」経済学説が、他の二つの構成要素の確立と並行して形成されつつあった時期をとりあげて、マルクスとエンゲルスの経済学説の初期の発展をあとづけているわけである。

2

本書の本文は12章にわかれており、マルクスとエンゲルスの著述を年代順に考察している。

第1章「カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの最初の諸労作(1844年以前)」は、第1節で「19世紀前半のライン州とドイツ」の政治・経済情勢について述べ、ついで第2節と第3節で、マルクスとエンゲルスを別個にとりあげて、傳記的叙述を主として彼らの最初期の労作について述べている。この第1節がその叙述をドイツだけに限定したことにたいして、編集者ブリューミンは「序文」で、「著者は第1章で、19世紀前半のドイツの発展の社會經濟的および政治的諸条件を簡略に特徴づけるだけにとどまって、他の諸國(たとえばイギリスとフランス)の經濟的および政治的発展がマルクス主義の形成にどのような影響をおよぼしたかを説明していない⁴⁾」といて、このことを本書の缺陷の一つに数えあげている。だが、著者がここで當時の社會情勢の説明をドイツだけに限定したことは、私には、著者が十分に

1) 『賃労働と資本』1891年版へのエンゲルスの「序文」邦譯、マルクス=エンゲルス2巻選集、(新書版)第1分冊、p. 91を参照。

2) 1857年12月8日づけ、エンゲルスあてのマルクスの手紙。

3) レーニン『カール・マルクス』邦譯、『マルクス=エンゲルス=マルクス主義』第1冊、p. 29。

4) 本書、p. 16。

考えたうえでのことだったのではないかとおもわれる。というのは、マルクスとエンゲルスは、その活動の最初期には、もっぱらドイツ人として育ち、ドイツのヘーゲル左派として行動していたからである。彼らがたんなるドイツ人から国際人となり国際社会主義運動の指導者となるには、まだ数年を要したのであって、彼らがそのように成長する過程は、のちの諸章の叙述から読みとることができる、と私は考える。

第2章は、主として『国民経済学批判大綱』をとりあげて、「フリードリヒ・エンゲルスの初期の経済学研究」を考察している。著者は、エンゲルスによるマルサス人口論の批判にかなりのスペースをさいている。

第3章は「経済学者たちからの抜粋にたいするカール・マルクスの批判的評注」と題されている。ここで研究対象となっているのは、マルクスが先行の経済学者たちの著作からの抜粋を書きこんだ膨大な研究ノートの一部で、1932年に当時のマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所から Marx-Engels Gesamtausgabe, Abt. I, B. 3 として発行された文献である。この章では、セー、スミス、リカード、ジェームス・ミルからの抜粋がとりあげられている。

第4章と第5章は「カール・マルクスの『経済学と哲学にかんする手稿』」をとりあつかっている。このうち、第4章は「第1手稿」を対象として、第2節で「マルクスによる賃銀、利潤および地代の分析」を研究し、第3節では、当時のマルクスがおこなった「経済学の批判とブルジョア的諸関係の批判」をあとづけている。そして第5章は第2手稿と第3手稿を「断片」別（最後の二つの断片をのぞき）に論じている。

この時期まで、マルクスとエンゲルスは文通のうえでの知合いにすぎなかった。しかし1844年の夏にエンゲルスがパリにマルクスをたずねてから、この二人の偉大な頭脳の緊密な実際の共同の活動が始まるのである。こうして第6章は、「カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの共同の活動の最初に書かれた諸著述」となって、『聖家族』が研究対象にとりあげられている。だが、残念なことには、ブリュンナーが「序文」で指摘しているように、『聖家族』と第8章の対象となっている『ドイツ・イデオロギー』の二つの重要な著述についての検討は、本書ではあまり入念になされてはいない⁵⁾。たとえば、『聖家族』にあてられているページ数(7ページ)は、『経済学と哲学にかんする手稿』の一つの断片「欲望、生産および分業」にあてられているページ数と

おなじである。そこで編集者は、第6章には3.5ページの、第8章には4ページあまりの補足をしている。

第7章は『イギリスにおける労働者階級の状態』である。著者はここで正當にも、「空想から科学への社会主義の発展における『イギリスにおける労働者階級の状態』の役割」(第3節)を強調している。

第8章の『ドイツ・イデオロギー』には、さきに指摘したような缺陷が見られる。

つぎの三つの章は、それ自體として独自の経済学上の著述を研究対象としている。すなわち、第9章は『哲学の貧困』を、第10章は『賃労働と資本』をとりあげ、第11章は「保護貿易論と自由貿易論にかんするカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの諸著作」について考察している。彼らは、もはやこの時期には、ブルドンと対決し自由貿易論の階級的意義を解明することによって、国際社会主義運動のまっただなかにいることとなったのである。これらの三つの章のうち、『哲学の貧困』をとりあつかった第9章は、私の考えでは十分でないようにおもわれる。独自の経済学的著書としてはマルクスにとって最初のものであるこの著作に、當然もっと大きな注意がはらわれてよかつたのではないだろうか？たとえば、商品の二つの要素と商品に體現された労働の二重性格の分析の問題について、著者は p. 227 に半ページほどをさいているにすぎないが、この問題で『哲学の貧困』は以前の諸著作とくらべてどれほど前進したか、またのちの『経済学批判』とくらべてどのくらい未展開のものをのこしているか、というようなことを、もっと経済学的にふかきつこんで考察してほしかつたようにおもふ。なお、編集者はこの章に5ページ半の補足をつけている。

最後の第12章は『共産黨宣言』であるが、これについてはここであらためて述べる必要はないであろう。

本書は、古い時代からのすぐれたソヴェト経済学者であるローゼンベルグの著書にふさわしい、学術的な著作であるといえよう。マルクス主義経済学を眞に理解するためには缺くことのできない、この学説の形成の歴史にかんする研究で、本書はすくなくからぬ寄與をなしえるであろう。最後に、彼の死後すでに6年たったわけだが、われわれの年代のものがわが國でマルクス主義経済学に入門しそれを研究するにあつたの、大きな導きの書を提供してくれたこの著者の死——それをわれわれは本書の「序文」ではじめて知つたのだが——に、哀悼の意を表したい。

5) 本書 p. 16 を参照。